

たのです。酷いものです、腰に貫通で拳ぐらいの穴が開きました。しかし今も元気で生きています。長谷川という人で、戦友会に来ますと裸になりそれを見せません。私が「長谷川、お前を一晚中担架に担いでいたぞ」と言うと、「そうか」と。本当に飛行機の機関砲でやられたのです。

アメリカの女性飛行士です。アメリカは、中国は女でもいいと、ほとんど女子で、ほんの低空で飛んで来ました。

それからというものは、ほとんど昼は歩きません、夜行軍となりました。ある民家へ入りますと、そこで初めて日本の「白地に赤く」の歌を子供が歌っていました。ここには日本人の医者が出たそうです。

ここから反転して三南作戦に入りました。

昭和十九年十一月十九日から掃討作戦に参加しました。米軍の飛行場を潰せというのが主な目的でした。

南昌の手前まで来た昭和二十年八月十七日に終戦を聞いたのです。そしてヤスリで補充兵の持っている古

い三八式歩兵銃も全部の銃の菊のご紋章を削り中国軍に渡したのです。

例えば大陸縦断八〇〇キロ、満州国の錦県から北支から中支への河南作戦、続いて揚子江南の湖南省で掃討作戦、さらには南下し広東省の遂州・贛州の在支米軍航空基地占領、南支海岸、三南作戦、そして対米戦のため北上中江西省で終戦でした。

以来、揚子江岸蕪錫にて抑留、昭和二十一年三月、懐かしの日本へ上陸したのでした。

湘桂、貴州作戦

鉄道部隊の技術者として

福岡県 有松 忠 男

私の家は農業でしたが、父は鉄道員として日豊線行橋駅機関区勤務で、兄弟は姉、妹二人で、男は私一人という環境でした。生まれは大正十年九月十四日ですから、昭和十六年徴集として行橋の公会堂で検査があ

り第一乙種合格現役兵でした。

昭和十七年一月十日、西部第七十六部隊、甘木の高射砲部隊入営。初年兵の時は一般基礎教育で、その後聴音機となって教育を受け一期検閲後、若松の脇田にあった要地防空西部第八〇六一部隊で新しい中隊が編成され、松尾中尉が中隊長となり本格的聴音機の聴測士になりました。六月砲兵一等兵、高度航速を測る計算班となりました。

計測器は直径一メートルを三六〇度にしてあり、仰向一五度以上のものが聴音機についています。これは五秒毎に諸元を高射砲に通信すると、高射砲は電気で連動し、方向、仰角と航空機の数も判ります。その飛行機の動きに従って照空灯も統一連動しています。

隊長がそれにより「撃て」の号令をかけるのです。十月には一選抜の上等兵となりましたが、男一人の長男でしたから幹部候補生には受験しませんでした。

若松、脇田での勤務は本土空襲の始まる前で命令受領要員でした。昭和十九年二月、私は鉄道に勤めていたため鉄道隊転属となりましたが、私等が防空兵の

始まりで、その教育を初めて現役兵として受けたのです。それは、昭和十六年に入った者は召集兵が多かったからでした。

昭和十九年二月、津田沼の鉄道第十二連隊が編成となり、私は転属、第四中隊平野隊、第三小隊（小野田耕治小隊長）の第五班に配属されたのです。防空の専門兵が鉄道隊へ転属かと小隊長は惜しまれました。

同十九年三月十日、中支派遣部隊として原隊を出発、下関から釜山へ朝鮮へ鮮満国境通過、更に山海関まで是有蓋貨車でしたが、一個小隊五〇人、藁は敷いてあっても三月の北支は寒く、貨車内は背のう、銃剣等でいっぱいでした。

三月二十日、蚌埠着、七月十五日まで鉄道の司令部の警備をしていました。十月には湖南省の冷水舖警備（鉄道隊）。広西省全県の架橋工事に従事しましたが我々は機関車が主でした。鉄道隊の中には機関車、修理、保線、駅勤務等があります。機関車の運転は上等兵以上でないと言えません。

湘桂作戦は南へと進攻し、占領した柳州、桂林の飛行場勤務もしましたが、滑走路は立派なものでした。底部には大きな石、上にぐり石、バラ石、更に上には土、表面はセメントでした。

飛行場では昼は空襲、夜は残敵に撃たれます。こちらは飛行場を使わないので、敵に使用させぬように防いでいました。これが飛行場警備の主な任務でした。空襲はP51カーチスホーク戦闘機、B25ノースアメリカン中爆撃機などでした。

昭和十九年十月に貴州作戦に参加しました。第十一軍の第三・第十三師団は、桂林、柳州を攻略し、残敵を追って貴州省にまで作戦を続けて、我々鉄道隊は歩兵と共に進撃しました。これは鉄道に必要な部品を接収するための作戦で、金城江まで庄司部隊の応援に行ったのです。鉄道部隊として、この奥地まで進攻したのは私達の部隊だけでした。

我が部隊が金城江に着いた時、庄司部隊は既に撤退していました。我々は資材、機材を外し、一台だけ機関車を残し、機材等は自動車隊へ渡して後送しまし

た。

毎日のように午前、午後必ず一日二回の空襲があります。戦闘機ですから山陰から急襲してくるのです。落下傘爆弾も落とされました。一個小隊離れての行動でしたが、自分を守りながら、機材を接収しながらの行動でした。チェッコ式軽機関銃を一個分隊毎に持って作業していたためか、あまり襲撃を受けずにすみました。一般の鉄道部隊と異なり、特殊の任務を持った隊であったので自衛力を持っていたため目的を達成することが出来たと思います。

この頃になると、在支米航空基地を占領し、奥地に進撃した湘桂作戦も目的を達成していましたが、上海・南京地区へ撤収の命令が大本営から支那派遣軍に来ていたので、急速撤退作戦が開始されました。我々末端者は、せっかくここまで占領したのにと思う心もありましたが、急ぎ撤退をしました。

我々は柳州まで戻り、柳州でトラック部隊に乗せてもらい、やっと長沙まで帰ることができました。もし徒歩でしたら一カ月以上もかかったことでしょう。

昭和二十年三月、小隊はそれぞれの任務に分かれ、私は機関区乗務員となり、六月には兵長を命ぜられ、洞庭湖の東側を夜間輸送のみの勤務でした。燃料の石炭が無くなったので、民家を崩して燃料材として、それを燃やして走る木炭列車でした。岳州と湘潭間を一晚で往復して、物資や兵器の輸送をしていました。

この湘桂作戦の当初の子定計画では、大陸縦貫の大東亜鉄道の建設だったそうです。空襲は予想外の時にやってきます。機関車を遮蔽してあるのを取りに行くため駅に着いたら、駅員が赤旗を振ってくれたので見たら空襲でした。機関車にも銃弾を撃ち込まれ、積んだ作業衣も兵器もめちゃくちゃにされ、機関車からは水が漏れてしまっていました。

機関車に弾が当たっていても、反対側までは貫通はしていませんでした。穴には木や適当な物を打ち込んで修復し使えるように応急措置は出来、結局その機関車は使えるようになりました。

飛行機からバリバリと撃たれると反対側に逃げ、林の中に隠れます。もう行ったと思うと反転して来るの

です。そのうち汽缶に当たり蒸気が漏れたと思うと敵機は帰って行きました。このように我々と敵機との戦いは続きました。空襲とともに地雷も怖いものでした。機関車の前に空車を繋いで走ります。このようにして機関車と曳車を守るようにしていましたから、空車が爆破されても人的被害は割合に少なかったのです。

昭和二十年六月一日付で、陸軍兵長に進級しました。私は金城江で機関車を修繕したり、空気圧縮機を直しました。一個中隊応援を頼み、これを据え付け、自動制動機（ブレーキ）でなく、エアーを止めるようにして単独制動機にしたりしました。この方法は本には書いてなく自分の考えでやったのです。エアーの通路である銅管でエアーを止めるようにしたのです。この功績で、小隊長は殊勲甲の金鷄勲章を上申すると言っておられました。

小隊長は歩兵科の出身でしたが、大学の工学部卒業で、架橋やトンネル工学には詳しい人でした。しか

し、機関車のことは判らぬゆえ「有松頼むぞ」ということでした。鉄道隊は戦争末期までには多く編成されましたが、技術者は急には教育出来ないので人数は少なかつたのです。基礎から習わぬと駄目で、そのため鉄道関係の技術者は少なかつたのです。

終戦は湖南省の重要な都市である長沙で聞いて伍長に任官しました。戦後、国共内戦の時には蒋介石軍に輸送協力をしました。鉄道の復旧は日本軍でなければ出来ず、機関車の運転も日本軍でなければ出来ません。そのため、蒋介石軍は何でも言う通りにしてくれました。米もくれたし給料も支給され、「鐵路先生」と言つて尊敬されました。髭を生やした大人から、「日本負けたここにおれ、嫁を世話してやる」と言つていました。中国軍ばかりでなく、日本軍の移動も我々の任務でした。戦後次のような経過で復員するところができました。

昭和二十一年四月 長沙を出発し、武昌に集結

五月 漢口集結

六月 上海に集結、復員船に乗船五

日、浦賀に着いたが、コレラ発生のため停泊

六月二十七日 浦賀上陸後復員

七月五日に復職。家にいたのは五日間だけであつた。

【解 説】

鉄道第十二連隊（統第二一四七部隊）

昭和十九年

二月十日 鉄道第十二連隊臨時編成下令

二月二十八日 編成業務着手

三月九日 津田沼鉄道第二補充隊において編成完結

（高所作業員一二〇人を含む）

三月十九日 中支安徽省蚌埠着

三月二十日～八月五日 津淮線建設作業に従事

八月六日 湖南省長沙県長沙に移駐

昭和十九年八月七日～二十年二月二十八日 湘桂戦に

参加。粵漢線建設、湘桂線の占領開拓に従事

昭和二十年

三月一日、八月十四日 湘桂作戦後に粵漢線建設増

強復旧並びに運転輸送に従事

八月十四日 終戦詔書発布

八月二十五日 復員下令

九月二日 停戦協定締結

九月三日 中国交通部に協力、粵漢線の鉄道業務に

参加

九月十六日 湖南省岳陽県冷水舖に移駐

昭和二十一年

二月十七日 中国交通部に協力し、湘桂線撤収作業
に参加

五月十日 内地帰還のため武漢地区に集結

六月十日 上海に集結

六月十七日 上海出発

六月二十七日 浦賀上陸、復員

〔一部次の通り別行動を取った者あり〕

昭和二十一年六月二十七日 佐世保上陸

七月六日 浦賀上陸